



ヘチマの花粉をアサガオのめしべにつけたら、種はできるの

生き物は、自分の仲間がほろびないように、子孫を残す

生き物は、自分の仲間がほろびて、なくなってしまうないように、自分の体質や性質を伝える遺伝子というものを、子孫に残して死にます。動物は、ふつう、オスとメスの遺伝子がいっしょになって、両方の性質や体質をもつ、卵や子どもが生まれてきます。

植物では、花粉がオスの遺伝子で、メスの遺伝子の入っているめしべに、花粉がついて、種ができます。このとき、できるだけ、オスとメス両方の、ちがった体質などが残るように、同じ花の中の花粉ではなく、別の花の花粉がめしべにつくように、くふうされていることが多いのです。

同じ種類の仲間どうしでないと、子孫を残せない

イヌやネコは、それぞれたくさんの種類に分かれています。イヌどうし、あるいはネコどうしの間には子どもが生まれますが、母親がイヌ、父親がネコという子どもは生まれません。でも、近い仲間である、イノシシとブタの間では、イノブタとよばれる子どもが生まれます。生き物は、同じ仲間か、同じような体質や性質をもつ、近い種類のものどうしでないと、子孫を残せないのです。

ヘチマはウリの仲間、アサガオはヒルガオの仲間、種類はまったくちがう植物です。ですから、ヘチマとアサガオでは、めしべに花粉をつけてやっても、種はできませんので、両方の性質や体質をもつ、子孫を残すことはできません。（監修・矢野 亮）

